

---

# 精霊の子供の話(モクカ)

かいと

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

精霊の子供の話 モクカ

### 【Nコード】

N9960Q

### 【作者名】

かいと

### 【あらすじ】

精霊が住む世界で生きる小さな子供の話。

主人公モクカは、己の生まれに苛立ちと嫌悪を抱きながら日々を過ごしていた。

生まれてこなければよかった、とまで思っていた彼の前に現れたのは、自分と同じようにどこか違う思いを抱いた子供だった。

※血生臭く残酷な描写を含みます。

サイトに掲載した話を推敲して投稿しています。

## 全捧与罰

俺だったら良かったのに  
俺に傷つけられる者は  
俺だったら良かったのに

血塗れのこの体には何の罰も無くて  
今も、あの時の手を想う

十十十

「……今日はもう、終わりだよ」

囁かれて、俺は顔を上げた。

俺のことを優しい眼で見下ろした黒髪の男が、目の前に佇んでい  
る。

その長い髪が風に揺れて光を弾いて、眩さにほんの少し目を細く  
した。

この人は風の精霊の、王様。＞風王くのセイクウ様だ。

どうしてこんな森の中で、俺とこの人が二人で立っているかと言  
うと、まあ色々あるからなのだけれど。

俺は一つ頭を下げて、ありがとうございました、と声を出す。すると大きな手が俺の頭に触れて、柔らかく掌が俺を撫でた。

「来月、『門』が開くから。近くなったら、連絡が行くからね」

穏やかな声へ、はい、と頷いた。

『門』とは便宜的な呼び方で、それはつまりただの裂け目だ。

俺はその『門』を心待ちにしている、いつも、この人や、他の3人の＞王＜の手助けを受けてあちら側へ行く。

あの子に会うために。

「じゃあ、家まで送ろうか」

囁き声が落ちて、俺は首を振った。

風の精霊の力を借りれば、そう遠くない俺の家までなんて数分も掛からない。

急いで帰りたいわけじゃないから、そんなの必要ない。

「俺、走って帰ります。鍛錬でしょ」

笑いながら言うと、身体を壊さない程度にね？ と微笑みながら、

それでも＞風王＜様は了承してくれた。

それで、もう一度頭を下げてから身を翻す。

「じゃあ、セイクウ様！ また今度！」

多分来月までは会わないだろう相手にそう告げて、俺は走り出した。

樹木や森を司る精霊達によって整地された道を、ただ駆ける。

途中にある小枝は、俺が近寄る事に気付くとそっとその身体を避

けてくれた。

だから俺は傷一つ付かないまま、ただその道を駆けていく。  
やがて、息が弾む頃になると、目の前が拓けて小さな家が現れた。  
穏やかな光に包まれた、こじんまりとした家だ。

俺は、そつとその家に近付く。

「……ただいま、帰りました」

呼び掛けて扉を開くと、奥から小さな足音がぱたぱたと近付いて  
来た。

「お帰りなさい、モクカちゃん」

微笑んだ声を掛けてきたのは、女の人だった。

光に透ける淡い金髪と、空色の瞳。柔らかそうな指には菜箸が握  
られていて、多分料理中に慌てて出迎えに来たんだろうと思う。

「……ただいま、おかあさん」

そつと言うと、嬉しそうに微笑んで見せるその顔は、あの子とそ  
っくりだった。

その顔からそつと目を逸らして、家の中を見回す。

「父さんは？」

小さな家の何処にも、家の主はいないようだ。

俺の問いに、お仕事よ、と目の前のその人は答えた。

「南の方の大きな森を拓きに行ったわ。帰りは、少し遅くなるみた  
い」

「ふうん……」

父さんは、俺と同じ、樹の精霊だ。森の開拓に駆り出されても不思議は無い。

俺は小さく頷いてから、二階に上がるための階段へ向かった。

「もう少しで出来るから、呼んだら降りてきてね」

柔らかな声が、俺へと掛かる。

背中だけで、俺はうん、と答えた。

十十十

俺の部屋は、窓が開いてない所為か、とても暗かった。その中をそろそろと歩いて、ベッドの上に倒れ込む。

「……あー……疲れた」

今日も＞風王く様のしごきは厳しかった。

上から拳を振り下ろしているくせに、どうして足払いが出来るんだろうか。とても不思議だ。

のろのろと仰向けになると、暗闇を孕んだ天井が俺を見下ろしている。

その暗い天井に、ぼんやりと浮かんだ顔があって、俺は目を閉じた。

淡い金色の、長い髪と、俺と同じ青緑の瞳。

「レイカ……」

俺の、母親の違う妹。

俺が生まれてかなり経ってから生まれたその幼い妹は、今、この家にはいない。

彼女は、『中界』と呼ばれる異界にいるのだ。

俺の腹違いの妹は、俺よりも誰よりも、その成長速度が速い。

そういう病で、それを治すことは今は出来ない、と>氷王<様が言っていた。

けれど、いつかは治療方法が見つかるかもしれない。

もちろん、見つからない可能性だってある。

けれど、もし一縷でも望みがあるならそれまでは自分たちと同じ速さで生きて欲しい、と願ったのは父さんとおかあさんだった。

俺達が住むレニア・シャームと、ルーズ・キャールという負で満ちた世界の狭間にある、『中界』と呼ばれるその世界は、流れる時間の速度が遅い。

だから、あの子はあそこへと閉じ込められた。

俺は、それを引き止められもなかった。

今だって、レイカをあそこから連れ出す事も出来ない。

ただ、>王<様達に頼み込んで、不定期に開く向こうへの狭間から、様子を見に行くくらいだ。

父さんとおかあさんは、あまり行ったことがない。会えば会うほど離れがたくなってしまいうからだと、そうしてあそこで過ごすようになってしまったら意味がないと、そういつていた。

通っている使い女達も、定期的に入れ替わる。

常に周囲の人間が入れ替わる状態で、レイカは今どうしているんだろうか。

そんな風に思ったって、レイカが今泣いていたって、俺にはどう

する事も出来ないのだ。

溜息を吐いて、寝返りを打つ。

横向いた先には、自分で閉めた扉がある。

暗い部屋で目を閉じれば、更なる暗闇が俺を包んでいく。

沈黙が鳴って、それに浸かっていくと不意に声が蘇った。

『……殺してやる!!』

それは男の低い声。

初めて聞いたその声を発したのは、黒い短髪の、青緑の瞳の男。

その言葉の後で男の手が伸びて、俺の首を締め上げた。

最初の泣き声を上げる前に呼吸を絶たれて、俺はただはくはくと口を開け閉めしたまま、赤黒い雫に塗れた男を見上げた。

苦しくて、苦しくて、でも俺の体はあまりにも幼かったから抵抗一つできない。

それを止めてくれたのは、白くて細い手だった。

『止めて、あげて……! その子に、罪は……』

声は、擦れた細いもので。

慌てたように男が俺を降ろして、その声の方へと近寄った。

俺は、床の上に転がされたまま、必死に呼吸をしつつ男の行方を追う。

男が駆け寄ったのは、床に寝ている女の傍だった。

その人は白い肌で、黒髪で、青緑の眼をした、男とよく似た顔の女の人で。

その腹が抉れて、真っ赤に染まっていた。

それを見て、俺は唐突に理解する。

俺は、あれを突き破ってここにいるのだ。



『あの子、に、罪は、無い、の……』

女の人と言う。

男はでも、と言って、その顔を女の白い指が撫でた。  
本当にそうなのかと、問いたくても俺の口は呼吸にしか使われていないから声は出ない。

だって、俺はまだ言葉を話すこともできなかった。

「……っ くそ」

呟いて、不快な記憶を振り払うために眼を開けた。  
そこには、先程よりは明るい暗闇がある。

どうしてレイカだったんだろうと、ぼんやり思う。

レイカが、どうして、あそこにいるんだろう。

どうして、俺じゃないんだろう。

俺こそが、ここではない世界にでも隔離されるべき存在なのに。

「モクカちゃん、降りてきて？」

声が、扉の外からかけられた。

俺は、それに応じて唇を噛む。

母親を殺した俺が、あそこに行くべきだったんだ。

十  
十  
十

夕飯を終えてから、ふと思い立って俺は家を抜け出した。

遅くから外出すると止められるから、こっそりと部屋の窓から、走り出して、もう真っ暗な森の中を進む。木々は俺を避けたから、転ぶことは無く。

日頃走り回って鍛えている肺が、ふいごの様な呼吸しか出来なくなるまで走ると、ようやく、目的地に着くことが出来た。

そこは、森の奥深くにある小さな泉。

木々が円形に作り上げ、今は月光を反射している。

大きく息をしながら、俺はようやく走り歩みに変えて、その泉に近付く。

冷たそうな水を湛えた、深い泉が俺を反射して映した。

それに、ゆっくりとかがみこみ、顔を近付ける。

冷たくて、深くて、暗い泉。

この奥にはいつも小さな次元の裂け目が出来て、俺は毎回ここからレイカの傍へと行っていた。

今は、もちろんそんな道は無い。

顔を、そっと水に浸す。

冷たい。

一度上体を起こしてから、俺は、冷たい水へと服のまま飛び込んだ。

しぶきの上がる音がする。

俺は泳がず、ただ体の力を抜いて浮いたまま、泉の底を見つめた。空からの月光も届かない位に深い、底へと目を凝らす。

ここからしか、誰も、行くことは出来ない。

一番レイカに近い場所。

ここにいれば、少しは、満たされる気がした。

だから、息の続く限り漂ってしようと決めて、俺は目を閉じた。

「……………おい！」

不意に声が水を隔てた鼓膜まで届いて、突然、水が俺を弾き上げた。

「うわ!？」

泉の岸まで弾かれて、驚きに声を上げながら尻餅を付く。  
まるで拒まれたようだった。いや、実際拒まれたのだろう。  
驚きながら、俺は周囲を見回す。  
そして背後に、そいつを見つけた。

「何やってるんだ！」

怒鳴るように上がる声は低くなく、かといって高い物でもない。  
月の下で見たその顔は透けるように白くて綺麗で、髪の毛は水の色をしている。

多分水の精霊だろう、耳は魚の胸ビレみたいになっていて、意志の強そうな蒼い瞳がこちらを見ていた。

「こんな所で溺れたら、誰も助けになんか来れないだろう！」

言いながら、そいつの手が俺に向けて広げられた。その指の間に大きな水かきが見える。多分、泳ぐの速いだろうな。

そいつが小さく何かを呟くと、水がぱらぱらと俺から剥がれた。  
服からも逃れて、急速に体が乾いていく。

驚いている間に、つい先程泉に浮いていたとは思えないほどに、

俺は乾いていた。

「ああ……ありがとう」

とりあえず言いながら、立ち上がる。

「でも、俺、自分で入ったから。溺れてないからね」

誤解を解くためにそう言うと、そいつは怪訝そうな顔をした。

「……泳ぐなら、昼間にしろ」

「いや、泳いでた訳でも無いんだ」

「じゃあ何だ」

「え？ ええっと……」

何、と問われても困る。

俺は眉を寄せた。

あの暗がりの向こうを思ったなんて話したら、自殺願望者と言われても仕方ない。

もしも親とか、あと＞王＜様達に報告でもされたらと思うとちよつと言ひ辛い。

少し考えて、俺は口を開いた。

「やっぱ、泳いでた」

そう言うことにしておこう。

前言撤回した俺に、そいつは呆氣にとられた顔をした。

「……そうか」

けれど、何も聞かない事にくれたらしく、ただ小さくそう言葉を零す。

優しい奴なんだろう。俺は笑って、もう一度泉へ目を向けた。暗くて深くて蒼い泉。

ここから、俺は、レイカのところへ行く。

繋がっていない今は、潜ったって行けない。

自分を納得させるように胸のうちに繰り返してから、俺は視線を水の精霊の子供へ戻した。

「あ、なあ、あんた、誰？」

そういえば名前も聞いていなかった、と思って訊ねると、その眉が片方上がる。

「……私を知らないのか？」

「うん」

少しばかり不思議そうな言葉に、もしかして有名な奴なんだろうか、とじつと目の前の顔を見る。

けれど、やっぱり見た覚えは無い。蒼い目も白い肌も整った顔も、一度見たら忘れるのは難しそうだ。

「そんな綺麗な顔、見たこと無い」

だからあっさりとそう告げると、綺麗なその顔にとっても嫌そうな色に登る。

それを見ながら、俺はそいつへと近付いた。

「俺、モクカって言うんだ。あんたは？」

「……私は、スイキだ」

答えながら、スイキは俺を睨んできた。

蒼い目には別に感情なんて浮かんでなくて、きっとそれがいつもの表情なんだろうと俺は思う。

じっとその顔を見てから手を差し出すと、スイキは戸惑ったようにそれを見下ろした。

「何だ？」

「家、何処？ 送るよ」

「何？」

「一人歩きは危険だよ。綺麗だしさ」

そんなに変態なんていないけど、万が一も在ることだし。

俺が言うと、スイキはまた嫌そうな顔をした。

それから、少し思案して、その白い手をこちらへと伸ばしてくる。

水かきの大きな掌が、俺の袖を掴んだ。

そして、一瞬で俺の視界が反転する。

「あだ！」

草花があるとはいえ硬い大地へと背中をしたたか打ち付けて、情けない声が出た。

俺の手を掴んだまま、立ち上がったスイキはこちらを見下ろしている。

「結構だ。自分の身くらい、自分で守れる」

こんな風に、と呟いて見てくる目は凛々しいことこの上ない。  
俺は笑って跳ね起きた。

「すっげ、スイキって強いんだ！」

「……あ、ああ。まあ、な」

俺の弾んだ声に戸惑ってか、怪訝そうな顔をしながら、それでも律儀にスイキは頷く。

油断していたとは言え、簡単に転ばされるなんて驚きだ。

一度、ちゃんと手合わせをしたい。

考えたらすぐ言っておくに限るから、その手を放して、なあ、とお願いしてみる事にした。

どうせ、来月まで＞風王＜様のお稽古は無いのだ。

「俺と、今度組み手してくれない？」

俺の突然の言葉に、スイキは少しばかり驚いたような顔をした。  
急な発言だから当然だろう。

「……私が？」

「そう！」

問いかけられて、しっかりと頷く。

この場にはスイキと俺しかいないのだから、今の発言で他のやつが対象だったらそれはそれで問題だとも思うけど。

「……いいぞ」

少し黙ってから、スイキは頷いた。

その顔が笑っていたので、俺も嬉しくて笑う。

「明後日、で良いか？」

「明後日？ うん！」

頷いて、約束だねと手を掴もうとしたら避けられたので、その袖を掴んで上下に振る。

袖を預けてくれたスイキは、じゃあ帰るから、とやんわり腕を振って、俺の手を離れた。

「あ、送ってく」

「……もう一回投げ飛ばされたいか」

「いやいや、家見ただけだから。行く行く」

手を掴みにくるのを避けて、ただ笑った。

俺の顔を見たスイキは、嘆息して肩を竦めながら、勝手にしろとただ一言置いて歩き出す。

その後を追いかけて、俺も歩き出した。

歩きながら、空を仰いでみる。

葉の間から、月と星がちらちらと見え隠れしていた。

何かの本で、あの光はずっと昔に死んだ輝きだと読んだ事がある。



死んだのに、何処までも届いて来る光。

もしかしたら、あの星の煌めきの幾つかは、レイカのところまで届くのだろうか。

一緒に見ていたのだと言ったなら、少しは笑ってくれるかも知れない。

「……おい、あー……モクカ」

「え？」

呼ばれて、驚いて視線を戻した。

呆れたように振り向いていたスイキが、転ぶぞ、と言う。空を仰いだまま歩いていたらだろう。

あははごめん、と笑って、俺は頭を掻いた。

それから、そう言えば、と口を開く。

「ねえスイキ」

「……なんだ？」

「スイキって、男？ 女？」

俺の問い掛けに、スイキの歩みが止まる。

その奇妙な様子に、あ、分化してないのかな？ と俺は口に手を当てた。

水の一族の内の一部には、小さな頃性別が確定していない種族がいる。

一定の時期になると性分化して、それでようやく一人前なのだと聞いたことがある。

もしかしたらスイキはそれで、まだ決まっていなかったのかも知れない。

い。

「……どちらでもない」

少しして歩みの再会と共に返されたのは予想通りの台詞で、そっか、と俺はただ返した。

「あれだね、スイキは綺麗だからどっちでも特だね」

これなら大きくなれば美人になるだろう。女でも男でもモテモテだ。間違いない。

ぼんやりと呟いた俺を、スイキが肩越しに振り向いた。

「……どうかな」

そんな風に呟く、スイキの顔は少し暗く見える。何故だろう。月が葉で隠れているからだろうか。

俺は首を傾げながら、それでもスイキを付いていった。

「ここだ」

やがて立ち止まったスイキが示した先には、湖と花畑をまたぐように建てられた大きな館だった。

「え？　ここ？」

驚いて、目を丸くする。

ここは知っていた。

むしろ、知らない精励のほうが稀に違いない。

「だって、ここ>氷王<様の家じゃない？」

問いかけながらスイキを見やると、そうだとスイキはあっさり頷いた。

「で、ここがスイキの家？」

「そうだ」

「……えっと」

つまり。

「スイキって、ここの使い女とかの、子供とか？」

大真面目に聞いた俺に、スイキは吹き出して、それから違うと言った。

十  
十  
十

スイキは、>氷王<様の子供だったらしい。

驚きながらも、俺は改めて明後日の約束を取り付けた。

それからスイキと別れて家に帰り、扉を開いたところでぴたりと動きを止める。

小さな家だから、入ったところからすぐにリビングが見えるのだ。いつもの席に座っている、俺より大きな背中。

父さんが帰っていた。

「……お帰り」

声を掛けると、父さんが食卓から振り返って黒い髪を揺らし、俺と同じ色の瞳に俺を映す。

「何処行ってたんだ？」

あんたのいない所。

そう言いたいのを堪えて、散歩だよと答えた。

それから、こちらを向いたままの視線から逃れる為に、自室へ上がる階段に足を掛ける。

「モクカ」

「もう眠いんだ。寝かせてよ」

登ろうとしたところで名前を呼ばれたのに、振り向きもせずに戻して、俺は自室へ駆け上がった。

モクカ、ともう一度声が掛かったけれど、それは無視する。

部屋に入り、扉に鍵を掛けて、真っ暗な所でずるずると座り込んだ。

真っ黒に染まった、部屋だ。

闇に目を凝らす事にも疲れて、のろのろと手探りで動き、ランプに火を入れる。

部屋の中に灯りが宿って、闇を端へと追いやる。

その中で立ち上がり、部屋に備え付けられた姿見の前に立った。父さんとは色の違う、土色の房と緑色の房が入り交じった無造作に伸びた髪と、父さんと同じ色の青緑色の瞳。それから、浅黒い肌。

指を伸ばして、姿見に触れた。  
硬くて冷たい、硝子の感触がする。  
数秒を置いて、溜息を吐いた。

「何で帰ってきてるんだよ……」

もう少し遅くなると思ったのに。

顔を見たくなかったと呟いて、俺は鏡から離れ、ベッドに転がる。  
軋んだ音がして、ベッドは柔らかく俺を受け止めた。

白いシーツは、少し埃の匂いがする。

レイカも、今頃は眠っているだろうか。

ああ、でも、あそこは時間の流れが遅いから、もしかしたらまだ  
昼かも。

そんなことを思うと、掴んだシーツが少し暖かい気がした。

早く逢いたいなど、思う。

会いに行つてあげるんじゃない。

俺が会いたいのだ。

レイカ。

たった一人の、俺の妹。

『にー、た』

『にーちゃ』

『にいさま』

幼い声と幼い指。同じ瞳。

この小さな生き物を守ることが出来たら、それだけでいい。

そう思っていたのに、俺はレイカを守ることすら出来なかった。

俺は、無力だ。

大切な物を守る力すらない。

「無駄な物は、あるくせに」

眩きは宙に浮いて、空気に溶けた。

それを見送って、目を閉じる。

自分で作った暗闇にわずかな恐怖を感じて、息を吸い込み、上がってきた心拍数を落ち着けるように努力した。

こんな恐い思いを、きっとレイカは一人で耐え続けているのだ。代われるものなら代わりたかったと、唇を噛みしめる。

だって、俺は奪ったのだ。

赤い飛沫を散らした、優しい声音のあの人を殺して。

そして、この手で父さんから、何を捨ててもいいくらい大事だった存在を奪ったのだから。

まともに父さんの顔も見れないくらいに申し訳なくても、この体には何の罰の跡も無い。

与えられる筈だった罰も、奪われたから。

でも。

罰は、受けるべきだ。

十  
十  
十  
十

血塗れのこの体には何の罰も無くて  
今も、あの時の手を想う

あの時

あの人  
が  
止め  
な  
か  
つ  
た  
ら

何  
を  
捧  
げ  
て  
も  
い  
い  
か  
ら  
罰  
を  
与  
え  
て  
は  
く  
れ  
な  
い  
だ  
ろ  
う  
か

n  
e  
x  
t

## 災厄色の髪

分かっているんだ

俺が、世界で一番存在してはいけない子供だってことは

十  
十  
十

俺が佇んでいるのは、中界と呼ばれる、精霊たちが治める世界とは異なる場所にある花畑の中央だった。

久しぶりに訪れたそこは、何一つ変わっていない。

いつまでも花々の咲き乱れる花畑は、時間の経過を感じさせない。ここはそういう場所だ。

俺や、他の精霊が住む世界よりも、極端に時間の流れが遅い。

本来なら、俺が足を踏み入れている場所じゃない。

「にいさまー！」

幼く、高い声が花畑に響く。

俺は振り向き、駆けて来る少女に微笑みながら両手を広げた。



「レイカ！」

「にいさま！」

俺のことを兄と呼んで、走って来るその少女は、俺より少しだけ小さな子供で、長い新芽色の髪を揺らして、俺と同じ翡翠の色をした両目を輝かせていた。

そのままレイカは俺に飛び付き、思ったよりも強かったその勢いに、抱き止めたまま後ろへとひっくり返る。

少し花びらが散って、ひらひらとそこに舞った。

「ひさしぶりね、にいさま！」

「おう。元気にしてたか？」

「もちろん！」

腕の中で起き上がり、人の上に座ったまま、レイカがくすくすと笑う。

この前会った時にぼつさりと肩まで切ってやった髪をゆるゆると辿って撫でれば、それは背中を越えて腰まで辿りついた。

ここにいてなお成長の早さを感じさせるレイカを、そっと抱き寄せる。

「レイカ……」

俺の異母妹はたった一人でこんな所に住んでいる。

「……重たくなったなあ」

俺の呟きに、しつれいよ！ と声が上がった。

それに笑って、抱き締める腕に力を込める。

レイカ。

俺が育ってから産まれた、俺の異母妹。

「……大きく、なったよなあ」

心よりも体の成長が早い少女を見下ろすと、彼女はあどけない表情のままで軽く首を傾げた。

髪に付いた桃色の花びらが零れて、俺の胸へと落ちる。

それを見てから起き上がり、レイカを解放した。

「にいさま？」

優しい瞳に俺を反射させてじっとこちらを覗き込んでくるレイカに、微笑を向ける。

「……何でもない。家に行くか」

そう囁くと、彼女は嬉しそうに頷いて立ち上がった。

そして、俺が起き上がるのを待ってから、小走りで駆けていく。

向かう先には、花畑の中央に立地している小さな白い家。

俺が四大精霊様達に無理を言って造らせてもらった、小さなレイカの家。

そこへと足向けながら、俺はレイカの幼い背中を見つめた。

極端に遅い時間の流れの中で生きながら、俺よりもわずかに速く成長しているその背中を、ただ見つめた。

「それでね、レイカがじぶんでやったの！」

「そうかあ、偉いな、レイカは」

「えへへっ。でね、それからね、いつもね」

嬉しそうに、レイカが話を紡ぐ。

それに耳を傾けて、微笑んで、頭を撫でる。

俺とレイカは、レイカの為に作られた小さな家の中で、そんな風にして過ごした。

いつもはレイカの身の回りの世話をする使い女も、今はいない。

俺と入れ替わりで、元々いた世界へと戻っている。

そして、俺がここから向こうへ戻る時に、次の使い女がやってくるのだ。

同じ人がずっとレイカの傍にいることは無い。

この世界の時間はあまりにも遅くて、ここに続けると元の世界に取り残されてしまうから。

「ねえねえ、にいさま」

ベッドに入ってもまだ話し続けるレイカは、毛布を引き上げながら俺を見た。

けれど、もう眠いんだろう。可愛らしい大きな瞳が、もう半分閉じている。

「おとうさまとおかあさま、どおしてるの？」

あふ、と眠たげなあくびを混じらせながら、それでもレイカは訊ねてきた。

「いつきてくれるの……？」

幼い問いかけに、俺はレイカを見詰めた。

俺の異母妹は、じっと俺を見ている。

その、眠たげに閉じ掛けたエメラルド色の瞳に、ゆっくりと微笑む俺が映り込んだ。

「今回は忙しかったんだ。そうだな……次の、次くらいには、一緒に来れるよ」

「つぎの……つぎ？」

「そうそう」

頷いて、もうすぐさ、と囁けば、レイカが嬉しそうに笑う。

眠たげな彼女の肩を、毛布ごしに柔らかく叩いた。

「おやすみ……レイカ」

おやすみなさい、と幼い声が返ってすぐに、穏やかな寝息が聞こえ出した。

それを聞きながら、肩を叩くことを止め、そして自分の掌を見詰める。

まだ幼さの残った小さな掌は、何も掴む事など出来ない。これがただの凶器なのだと言うことを、俺は知っている。

拳を握って、それから、俺はゆっくりと起き上がった。

レイカと一緒に眠って欲しいと言うけれど、まだ一緒に眠った事はない。

俺の寢床は、レイカの寢室の隣りにある、リビングのソファだ。

ベッドを降りて立ち上がり、レイカの眠る寢室を出る。

早く眠ってしまおうとは思うけれど、まだ眠くなかった。

「……散歩にでも、行くかな」

ぽつりと呟く。

少し夜風にでも当たれば、眠気もやってくるだろう。

俺の足は、ゆっくりと、家を出るために動いた。

十  
十  
十

土を踏み締めて、夜空の下を歩いた。

風が穏やかに吹いて、暗闇の中で花達を揺らす。

空には月がいたけれど、その光は弱々しくて、俺の影を僅かに大地へと縫いとめるくらいしか出来ていない。

さて、何処まで行こうか。

俺は立ち止まり、周囲を見回す。

後方には、レイカが眠る小さな家。

前方には広がる花畑と、暗い森。

「どっちも同じか……」

ふう、と息を吐きながら呟く。

その時、不意に吹いた風に乗って、小さな唸り声が聞えた。

「え……?」

思わず、耳を澄ませる。

先程よりも強く、それが聞える。

低く、小さな、唸り声。

人の姿をしたものが発しているとは思えない、声。

「何だ……?」

呟いた俺は、声が聞えてきた、前方の森の中へと足を進める事にした。

十十十

深夜の森は、異様なまでに光を通して明るく、そして酷い匂いに満ちていた。

顔を顰めながら、足を止めて、前に立つ影を睨む。

森に入っただけなのに、俺は、先程の奇妙な唸り声の主を見つけた。

それが、目の前にいる奴だ。

月が、星と一緒に懸命に、俺とそいつを照らす。

そいつは、魔物だった。

そして、本で見たり、炎の精霊達が倒し連れて来たりする奴よりも、巨大に見えた。

どうしてこんな所にこいつが居るんだろう。

中界で魔物を見たという話なんて、聞いたこともない。

レイカだって、一言も言わなかった。

だから、居ないんだと思っていたのに。

けれど、目の前にいるこいつは、現実に存在している。

ぐるぐる、と魔物が唸る。

俺の五倍は軽くあるだろう体を、鳥のような鋭い爪のある足で支えている。

体自体を覆っているのは獣みたいな毛皮で、顔はひひのみたいだ。両の肩から垂れ下がる2本の腕は大地に付くくらいに長く、背中には、出来そこないの虫の羽が生えている。

そして、そいつの体全てから、腐りかけた魚みtainな、嘔吐を誘う悪臭が放たれていた。

「……くそ……っ」

匂いに慣れない鼻に舌打ちしながら、周囲の木々へと呼びかける。魔物を抑えてほしいという俺の願いに、眠たげな動きをしながらそれでも木々は応えてくれた。

木のつるが、四方八方から目の前の魔物へと伸び、巻きつき、捕らえる。

けれどすぐに、巻きついたつるは黒い色へと変色し、腐ってぼろぼろと落ちていった。

「っ！」

驚いて見開いた世界で、目の前に立つ魔物が長い手を振りかぶる。それは鞭のようになって俺へと放たれ、左の頬に酷い痛みを感じた時には、俺の頭は大地へめり込んでいた。

視界がぐらぐらと揺れる。

体の上に、重みが与えられた。

踏まれてると気付いた時には、体がきしむような力が加えられて、口から無意味に息が吐き出される。

「っは……がっ！」

口から思わず吐き出した唾には血が混じっていた。頬を打たれた時に口の中を切ったらしい。

痛い。とても痛い。

手の先がしびれて動かない。

俺の上で、魔物が雄叫ぶ。

どうしよう。

どうしたら良いんだろう。

どうにか、しないと。

「……レイカ……！」

花畑の中央にある小さな家の中で眠る、小さな俺の異母妹。

もしも俺がここでこいつに殺されたら、次は、レイカだ。

そんなのはいやだ。

耳の奥で、心臓の音が鳴っている。他の音を掻き消すような大きな音の鼓動が聞える。

しびれて痛む体の隅々まで、ざわざわと漣のような感触が広がっていく。

目の前が赤く染まった。

体を突き動かしたのは、怒りにも似た恐怖だったのかも知れない。



気付けば、俺はぼんやりと立ちつくしていた。  
生臭い匂いに既に鼻は麻痺していて、体中がべたべたして気持ち  
が悪い。

足元には、ドロドロとした赤い液体と、それに浮く幾つかの塊た  
ち。

それが何なのかを理解して、溜息が出た。

「……汚ね……」

呟きながら、魔物の体液に塗れて汚れた、汚い掌で己の髪を掴む。

伸ばした髪はいつも鏡でみるような混ざり合った緑色ではなく、  
すべての色を混ぜたようなにこった黒に染まっていた。

感情が高ぶった時、黒へと変色してしまう髪。

それは、俺が、異端児である証だ。

「……はは……ははは……」

小さく笑って見たが、声が擦れてみっともない。

口を閉じ、ついでに目を閉じる。

精霊の世界にだって、いくつかの禁忌がある。

みだりに他の世界へ行ってはいけないだとか。

四大精霊、つまりは＞王＜様達の命令には従わなくてはならない  
とか。

『純血種』を創ってはならない、とか。

そして、俺はその禁忌の子供だった。

『純血種』は、血の近い二人の間に生まれる、とてつもなく濃い

血を持った精霊。

俺の母親と父さんは、兄妹だった。

一族から追い出されても気にならないくらいに互いを求めた、たった二人の兄妹だった。

「……………」

目を閉じたままの暗闇で、叫び声が蘇る。

『殺してやる』と、父さんが叫んでいたのを、俺はちゃんと覚えている。

産まれた瞬間に、俺は実の父親にとっての仇になった。

ああ、でも当然じゃないか。

俺は自力で母親の腹を突き破り、世界へと生まれ出でた。

そうして父さんの愛しい人を殺した。

だから『純血種』は禁忌とされているんだ、とセイクウ様が言っていた。

その存在は、産まれた時から業を背負ってしまいうから。

必ず母親を殺してしまうから。

不幸に、なるから。

君だけじゃなかったし君のせいじゃない、と優しい大きな掌が俺の頭を撫でる度に、俺はどうして良いのか分からなくて笑っていた。だって、憶えているんだ。

初めて見た外の世界を、彩る赤黒い飛沫の花びらを。

産まれた俺を見下ろした、憎しみに満ちた父さんの瞳を。

伸びてきた大きな手を。

圧迫された首を。

産声を上げる前に呼吸を奪われた、その苦しさを。

憶えているんだ。

弱々しく、それを止めた女の人の声を。

その、笑顔を。

俺は殺したのに、俺を産んだあの人は微笑んでいた。

「……っ……ふ……っ」

惨めに漏らした嗚咽は、酷く大きく聞こえた。

ごめんなさい、と、どれだけ謝ってももう遅い。

だから俺は暫く、そこに座り込んでいた。

十  
十  
十

夜が明ける前に帰ろうと、ふらふらと森の中を歩いて、花畑に辿りつく。

そうして足を花々の間へ伸ばした途端、体中に貼りついていた魔物の体液が、吹き飛ばされるように俺から剥がれて落ちた。

驚いて目をやれば、花畑の外で、魔物から滴っていたのと同じ水がたまった水たまりがある。

そして、俺の体には、もう一滴もそれは残っていなかった。

「……ああ、結界か……」

ふと気付いて、ぼつりと呟く。

きっと、>王く様達がこの花畑に結界を張っているのだ。

それが、レイカを守ってくれている。

だから魔物の気配であるものを全て拒むんだらうと、水たまりを眺めてそんな風に思った。

つらつらと考えているうちに、気持ちが平静になってきたのかも

知れない。風が吹いて揺れた俺の髪は、もとの色に戻っていた。

「……早く戻ろう……」

ふ、と息を吐いた。

弱々しい月光を発する塊ももう空から傾いているから、あと少しで夜明けがやってくる。

それまでに家へ戻ろうと、俺は足を動かした。

帰ったら、とりあえず水でも浴びよう。

もう汚れは殆ど結界に阻まれて落ちてしまったけれど、それでも体に染みついた感触が気持ち悪いから。

それから、出来たら、少し眠って。

いくらかは魘されるかもしれないけれど、多分いつもよりマシだろう。

そして、起きてきたレイカに起こされたら、一緒に食事を作ろう。いっぱい話をしよう。

いっぱいいいっぱい、話をしよう。

ただひとりのきょうだいと、その寂しさを分かち合えるように。

俺の足は、きちんと小さな家へと辿り着いた。

俺の汚れた掌がゆっくりと扉を開き、

「……ただいま」

とても小さな声で呟いて、小さな家の中へと入った。

分かっているんだ

俺が、世界で一番存在してはいけない子供だってことは  
親を殺した最悪な子供だってことは

誰かに望まれる 価値すら無い子供だってことは

n  
e  
x  
t

ぼくは、てをのぼした

誰か 罰をください

誰か 償いをさせてください

でないと 勘違いしてしまうから

望まれて生まれた子供だったのだと

勘違い してしまうから

十  
十  
十

「……っ！」

真っ暗な闇の中で首を締め上げられる、酷く嫌な夢を見て飛び起きた。

どきどきと心臓が五月蠅くて眉が寄る。

目覚めた先は自分のベッドの上で、窓の外は明るい。

明るさからして、もう昼時だろう。どうやら、いつもの起床時間を寝過ごしたらしい。

「……っ……夢、だよな……」

締め上げられた首の感触がまだ残っているようで、恐る恐る首をさすった。

もしかすると、少し魘されていたかもしれない。

そのままベッドを降りて、寝汗を吸ったシャツを脱ぎ捨てる。ひとまずは着替えて、それから部屋を出た。

階下からは食事を支度する物音が聞こえる。

覗くと、台所でおかあさんが昼食を作っていた。

父さんはまだ戻ってきていないらしい。

良かった、と一息吐き、階段を下りきる。

その物音で気がついたのか、おかあさんが振り向いた。

「あら、おはよう。もうすぐご飯出来るからね」

微笑みながらの言葉に頷いて、それから、テーブルの上に食事がまだ用意されていないのを確認する。

「……ちよっと、外に出てくるよ」

目が覚めるように散歩してくると告げると、ちゃんとご飯食べに戻ってきなさいね、と優しい声で言われた。

頷いて答えて、俺は外へと出る。

父さんが仕事先から戻って昼食を摂る間、何処かで時間を潰してこよう。

せめて父さんが俺を見ることなく楽しく食事出来るように。

それは、俺の日課だった。

森の中に出来た小道をゆったりと歩いて、空を見上げる。

空は腹立たしいほどに真っ青だ。

森の中の綺麗な空気を、胸一杯に吸い込む。  
木々の枝を潜って小川を飛び越えて、凹凸のある獣道を、俺は歩いていく。

淡々と進むその足を、ふと何かが呼び止めた。

「……ん？」

振り向いても見回しても、誰もいない。  
けれど、その何かは確かに、俺を呼んでいる。

「……なんだ？」

声じゃない。

何かの気配が、俺を何処かへ連れて行こうとしているみたいだ。

まあ、時間潰しくらいにはなるだろう。

俺は、その誘いに従って進む方角を変えた。まだ整地されていない草むらや茂みの間を、ずかずかと進む。

俺が樹の精霊だから、枝達は俺のことを避けてくれた。

そうして、茂み達の間を抜けて、俺を呼ぶその何かのある場所へ、ようやく辿り着く。

高く高くそそり立つ崖があって、高いなとそれを見上げてからそのまま視線を下へと辿らせて、眼を見開く。

「な……!？」

崖の真下に、子供が落ちていた。

黒い髪と、顔の左半分を覆っている白い包帯。

目を閉じて、仰向けで、まるで眠ってでもいるかのように動かない。  
いや、もしかしたら死んでるのかも知れない。凄い量の血が出て



いる。

崖から落ちたのだろうことは明白だった。

俺は駆け寄って、俺と年齢はそう変わらないだろうその子の傍に膝をつき、その顔を覗き込む。

「……おい、生きてるのか……!？」

ぶしつけに呼び掛けると、少し間を置いてから、弱々しくその瞼が開かれた。

闇の淵みたい真っ暗な瞳がそこから覗いて、俺を見る。

「あ、良かった、意識あるんだ？ 聞こえてる？」

意識があることにほっとしながら訊ねると、頷こうとしたらしい子供は、僅かに動いて顔を顰めた。

白い包帯がじわじわと赤くなっていく。

今の動きで更に出血したらしい。

大丈夫か、と手を伸ばし掛けた俺は、しかしそれを途中で止めた。少し動いただけで今の出血だ。下手に触ったら不味いかも知れない。

しかし、そうなると、抱き上げて治療が出来るところへ運ぶなんて事は出来そうにない。

風の精霊を呼ぼうかとも思うけれど、あの運び方は風任せで力加減が上手く出来ないからか、結構荒っぽい。

運んでいく間に死んでしまったら大変だ。

ここに、治療が出来る精霊を呼んだ方が良さだろう。

そう考えて、すぐにひとりの顔が浮かぶ。他に水の精霊の知り合いないなんていないのだから、それも当然だ。

俺は決めて、子供を見下ろしながら立ち上がった。

そしてすぐに踵を返して、言葉を置いていくのさえも惜しんで走

り出す。

早く。

早く早く早く。

早くしないと、あの子は死んでしまう。

そう思ったから、だから一目散に走った。

十十十

「スイキ、スイキ、スイキいー！」

走る間に見えてきた館の方へ向かって声を張り上げながら、俺は忙しく足を動かした。

ばたばたと足音を立てて、上がる息も整えられないまま、駆け込んだのは大きな館の中だ。

ちように歩いていった使い女さんが廊下で目を丸くして、ちよつと声を上げたのも無視した俺は、この館に住む友達の名前を呼びながら廊下を走った。

「スイキ、スイキ、スイキいーっ！！」

「……おい、どうしたんだ？」

通り過ぎた扉が開いて、そこから顔を出したのは俺が捜し求めていた水の精霊だ。

足を止めた俺はそのままの勢いで身を翻し、その扉の方へと駆け戻った。

「スイキいた！ 今すぐ！ 今、出られないか！？」

「……本当に、どうしたんだ？」

不思議そうに、スイキが首を傾げる。それも当然だ。  
俺は、慌てて説明した。

「さっき、そこで！ ほら崖あるじゃん、あそこの下で！ 子供が落ちてたんだよ、酷い大怪我で！ だから早く行こう！」

「……は！？ 何だと！？」

「だから、子供だよ！ 髪が黒くて、そうだ顔に包帯も巻いてた！ 左半分くらい覆ってたし、他に悪いところあったのかも！ 早く、早く行かなけりゃやばいよ！」

思い出してまた青くなってしまつて、俺は手を伸ばして半開きの扉を大きく開かせる。

スイキは触られるのが嫌いですぐに気分が悪くなるから、手を差し出したりはしない。

スイキは、俺の言葉に目を見開いて、それから後ろを振り向いた。その動きで、俺も部屋の中へと目を向ける。

そこには、スイキ以外に人影が二つあった。

一人は、男の人。＞氷王＜様だ。いつも通りの厳しい無表情で、ソファに座っている。

その向かいにも、一人。

見たことのない顔の、俺と同じ年くらいの奴だ。

そいつは物凄く真っ青な顔をして、こちらへと駆け寄った。近付きすぎたのか、スイキが慌てたように廊下へ出る。

「そ、その子、チノじゃなかったか!？」

燃えるように真っ赤な目を不安で揺らしながら、そいつは俺の手を捕まえた。

必死な指には力が込められていて、僅かに痛い程だ。  
言われても、俺はその名前を知らない。

「分からない、見たこと無い子だったのは確かだけど……」

「黒い髪で、黒い目で! ……そうだ、しゃべらなかつただろ?!  
呻き声一つ出さなかつただろ!？」

「声？」

言われて、ええと、と考える。

確かに、声を聞いた憶えは無い。声も出せないくらい痛かつたの  
かも知れないけれど。

俺が頷くと、俺の手を放したそいつは、今度は俺の襟首を掴んだ。

「何処だ!？ 何処にいたんだ!？」

「わ! ちょ、ちょっと待って!!」

言葉と共にがくがくと揺すられて、慌てて突き飛ばす。  
今はこいつと遊んでる場合じゃない。

喚きそうな目の前の相手から目を逸らして、俺はスイキを見た。

「早く行こう、スイキ! あのまんまじゃ危ないって!」

「ああ、分かった。……父様！」

頷いたスイキが室内を見やる。

『父様』という言葉に、そういえば>氷王<様も居たということ  
を俺は思い出した。

かなり酷い怪我だったから、もしかすると>王<様を連れて行っ  
た方が良さんだろうか。

そう思っで見やってみたけど、>氷王<様は自分が行こうとか言  
うこともなく、ただ俺達の方を見ているだけだった。

「私はすぐに出ることが出来ない。スイキ、先にお前が行け」

そうしてあっさりとそう言い放たれて、む、と眉間に皺を寄せる。  
焦っている様子が全く見当たらない。

自分が行かなくてもスイキが行くなら大丈夫だとか思っているの  
かもしれないけど、死にそうだって俺は言ってるのに。

「分かりました。もしも手におえないほどなら、すぐに引き返して  
きます」

抗議しようと俺が口を開く前に、スイキがそう言い放った。

>氷王<様が頷いて、それから立ち上がった。

「おい、そのの」

「……俺ですか？」

「そうだ。モクカ、だったか。お前だ」

何だろう、と思っている間に、上背のあるその人が、茶髪少年の

後ろに佇んで俺を見下ろす。

「お前が言う、その怪我をしている子供というのは、恐らく忌み子だが。それでも、助けたいか？」

囁いて訊ねる声には、何の感情もこもっていないみたいだ。

俺は、湖の底みたいに静かなその目を見返した。

「……忌み子？」

その呼び名は知っている。

額に魔法石もない、呪われた出来損ないの化け物だとか、そんな風に聞いたことがある。

聞かされた時にだって浮かばなかった嫌悪感は、焦りすぎた俺の心には変化も与えない。

だって化け物なのは俺も同じだし、忌み子がどんな『化け物』にしたって、俺以上に最悪な存在がいるはずが無い。

それに。

「だって……」

血塗れで倒れていた、小さなあの子を思い出す。

「だって早く助けなきゃ死んじゃうだろ！」

俺の叫ぶような声に、そうか、とヒョウガキ様は頷いた。

その動きを見ている暇すら惜しいのか、早く連れて行け、と、茶髪の奴が声を上げた。

それに弾かれたように、俺も走り出す。

来た道を辿るように、廊下から玄関、そして外へ。

肩越しに振り返ると、ちゃんとスイキも付いて来ていた。

俺のすぐ後ろを走る茶髪と目が合って、話しかけようとして、名前を知らないのを思い出す。

「なあ！ お前！ 名前、なんて言うの！」

走りながら問いかけると、走りながら答えが返った。

「カエン、だ！」

暑苦しそうな名前だ。

そんな風に思いながら、俺は更に足を速めた。

後ろからは足音が二人分。

俺達は、森の中を走り続けた。

十  
十  
十

辿り着いた森の、すぐ傍で。

落ちていた木の枝で地面に、風の精霊を呼ぶ印を刻んだ俺は、座り込んでいるスイキから、少し離れて隣りに座った。

疲れ果てた様子のスイキを見ながら口を開く。

「なあ、大丈夫か？」

「……ああ」

頷いて、スイキは自分の顔をその手で覆った。

「……力が、全然足りなかった……」

さつきまで、スイキは森の奥の崖下に倒れていた子供の怪我を治療をしていた。

あんまりにもその怪我が酷すぎて、スイキの手には負えなかったらしい。

スイキはその出血と痛みを抑える応急処置をしてくれた。

それで、俺達は今からヒョウガキ様を呼びに行くのだ。

だったら最初から来てくれたらよかったのに、と呟いたら、スイキが「氷王く様はすぐに館を出られない務めなんだと教えてくれた。」

確かに、治して欲しくて怪我人とかを抱えて館へ飛び込んだのに、治す人は今出かけています、なんて言われたら最悪だもんな。

抗議しなくてよかった、とこっそり思った。

「……駄目だった……」

落ち込んでいるのか、スイキが呟く。

俺は首を傾げて呟いた。

「仕方ないだろ？ 足りなかったんだから」

ちょっと言い方が冷たかっただろうか。

スイキが弾かれたように顔を上げ、俺を睨んだ。

その視線を見返しながら、だってさ、と続ける。

「俺達まだ子供じゃん？ 勉強し続けて人生もようやく下り坂って感じの「氷王く様達と、張り合える訳ないしさ」



「下り坂って……」

スイキの呆れ顔に笑いながら、俺は肩を竦めた。

「でもさ、背伸びしたって仕方ないし。出来ないことを誤魔化したって、出来るようにはならないしな」

ただの事実を呟いて、俺はにやりと笑った。

だって、どうあがこうとも、出来ないことがすぐに出来るようになるわけがない。

もしそんなことが出来るんなら、俺は今すぐレイカの病気を治してあの場所から連れ戻して寂しがりやなレイカを父さんとおかあさんの側に居させてやるし、何の保護もいらぬ存在になって父さんの前から姿を消してみせる。

「だけどさ、これから勉強して出来るようになれば良いだろ？」

それすら出来ない無力な手で、俺はぴんと人差し指を立てた。

「俺もスイキも、まだまだこれからだって！」

分からないことがあったら、素直に聞いて学んだらいい。

俺は一人でも生きられるように、強くしてもらえよう＞精霊王＜ 様達にお願いした。

＞風王＜様のしごきは厳しいけど、着実に自分が強くなっているのを感じるし、もう少し大きくなったらひとり立ちできるから、そしたらレイカの病気を治す方法を探してくれている＞氷王＜様の手伝いだってできる。

出来ないことは努力して物にすればそれでいい。

俺にはまだまだ時間があるし、スイキだってそれは同じなんだ。  
俺の言葉に、スイキは幾度か瞬きをした。  
それから、俺にやりと笑み返す。

「……当たり前だ」

「あ、何それ。人がせっかくさあ」

「慰め方が下手だな。私ならもっと上手く出来る」

「うっわ、酷え」

むっと頬を膨らませて見せながら、俺はそれでも内心胸を撫で下ろした。

初めて会った時からスイキは強気な奴だったから、落ち込むなんてらしくなくて、こちらが落ち着かない。

よしよし良くやった俺と、笑っているスイキを見ながら自画自賛していた時、突然何かが俺の頭の上に落下した。

「あうー」

同時に、そんな鳴き声。

「うわ、何!？」

驚いて、俺はそれを掴み降ろす。

それは、柔らかそうな頬をした、赤ちゃんだった。

歯もまだ揃ってなさそうな、本当に小さな赤ちゃんだ。

にこにこ笑って俺を見上げ、その視線をスイキへ向ける。  
くりくりした瞳が、大変可愛い。

「……こいつ可愛いなあ」

呟いて、俺はそのうす緑色の髪に頬擦りしてみた。独特のミルクの匂いが鼻をくすぐる。

レイカもこんな風だったな、などと思い出して、それから目の前のスイキにも下のきょうだいが居たのを思い出した。

「スイキも抱っこしてみるか？」

言いながら子供を差し出してみる。

スイキは、頷く代わりに俺から少し離れた。

「迂闊に近づけるんじゃない、馬鹿者」

「……こんなに小さい子でも、駄目？」

怒られたので、赤ちゃんを抱き直しながら俺は訊ねた。スイキが頷く。

「絶対、私に触れさせるな。倒れる」

スイキは、しっかりと言い放った。

どうしてかは分からないけれど、俺の目の前に座る＞氷王＜様の子供は、他の人に触ることが出来ない。

気分が悪くなって、最終的には倒れてしまう、らしい。まだ見たことはないけれど。

以前、レイカにやるようにスキンシップを取ろうとしたら殴られたのだ。

殴るのは大丈夫だということは、やっぱり自分から意識して触る

分には我慢できるってことなんだろうし、だから赤ちゃんは抱っこできるかと思っただけけれど。

「……それって、やっぱり、タイジンキョウフショウとかって奴なのかな」

「いや、昔は平気だったし、別にトラウマは無いんだ。多分……体質になってしまったんだろう」

スイキが、少しだけ苦々しげに呟く。

それから首を振り、とにかく私の傍には寄るなと俺に告げて、もう少し離れた。

それは当然の対策だ。

赤ちゃんというのはとにかく興味を引く物は何だって掴みたがるし、たぐり寄せられる物は何だって口に入れたがるのだから。

俺の髪みたいに。

「痛い痛い痛い痛い、痛いから止めてくれー」

物凄く純真な目をして人の髪を引っ張る子供に、首を捻って髪の毛を取り上げながら請う。

子供はまったく気にせずに笑いながら、髪を取り上げられても不機嫌にはならず、ううだのあうだの喋っていた。

髪を避難させてから、その顔をもう一度見つめる。

「で、お前は一体何処の子なんだあ？」

「うちの子さ」

低い声と影が落ちたのは、殆ど同時だった。

驚いて仰いだ空に、男が一人、寝そべって浮かんでいる。  
黒い長髪の、大きな体の、優しい笑みの人。

「セイクウ様」

俺が呼ぶと、セイクウ様はその穏やかな笑みを深くしながら、その手を俺へと伸ばす。

伸ばされた腕に赤ちゃんを差し出しながら、俺は立ち上がった。  
ただ風の精霊を呼んだだけなのに、>風王<様がくるなんてただ過剰サービスだ。

「こんにちは、ヒョウガキの子供。それから、モクカくん」

俺から我が子を受け取った風の>王<様が、ゆっくりと大地の上に降り立った。

「呼んだのは君たちかい？」

俺が大地に書いた印を見て言うから、俺は頷く。

「ヒョウガキ様の所まで、よろしくお願いします」

十  
十  
十

ヒョウガキ様は、呼びに来た俺達に館に残っているように言って、そのまま子連れの友達をひっつかまえて行ってしまった。

応接間にはどうやらヒョウガキ様が呼んだ他の水の精霊が何人かいるらしく、俺とスイキは、スイキの自室でソファに座って、とりあえず使い女さんが入れてくれたお茶を飲んでいる。

スイキの部屋にあったチェス盤を間に敷いて、黒と白の駒戦争を始めてから、もう十分くらいだろうか。

「……あー、駄目だ」

盤上はどう運んでも俺の負けになる状況で、俺は溜息と共に降参した。

「スイキやっぱり強いなあ」

「お前は詰めが甘すぎる」

スイキは笑って俺のクイーンを弾いて倒し、こちらを見た。

スイキは綺麗な顔をしていると思う。澄んだ水みたいだ。

少し眠くなっていた俺の頭が、そうやって見つめられることで緊張してクリアになる。

その海色の眼はじっと俺を見たまま、ふと眇められた。

睨まれる覚えなんてないのだけれどと思いながら、何となく居住まいを直す。

スイキが、改めて口を開いた。

「眠れていないのか？」

「……は？」

「目が疲れてるぞ。目の下に隈もある」

何を突然と眼を丸くする俺に構わず、スイキは続ける。そして俺の目を覗き込むように見た。

俺は、ぱちくりと目を丸くする。

まさか、気付かれてるなんて思わなかった。

スイキはじつと俺を見ている。話さないと解放しない、とでも言うような目だ。

だから、仕方なく俺は答えた。

「最近、悪い夢ばかり見るんだ。それだけだよ」

答えると、どんな夢だ、と問われる。

だから俺は正直に答えた。

「暗闇の中で誰かに首を絞められる夢、かな」

それは母さんが死んだあの時、父さんが俺を殺そうとした瞬間の夢だった。

申し訳なくて申し訳なくて、哀しくて、俺はいつも跳び起きる。

いつの間にか俺は、父さんの顔を真っ直ぐ見れなくなった。

いつからだろうか。

もしかしたら、初めからだったのかも知れない。

そんな事を想いだしていると、スイキが口を開いた。

「モクカ」

「ん、何？」

「この間、私は本を読んだ」

「……は？」

「古い本だ。父様の手書きの。日記みたいな走り書きばかりの、けれど知識の詰まった本だった」

何を突然と眼を丸くする俺に構わず、スイキは続ける。

何だろう。

俺は、胸に手を当てた。

何でだろう。

酷く、嫌な予感がする。

「その本の中に、ある子供の事が書いてあった」

スイキは言う。

「生まれるその瞬間に、母親を死なせてしまった子供の事が、書いてあった」

ひやりと。

背中を冷たい刃が辿った。

俺は呼吸すら忘れてスイキを見つめる。

まさか。

まさかまさかまさか。

まさか。

そんな。

「その子供は、近い血筋の間にだけ生まれる、一般から見れば『禁忌』と呼ばれる類に属する子供だった」

スイキの言葉が頭の中を殴りつける。  
目の前が真っ暗になっていくようだ。



俺の顔を見ていたスイキが、ふと俺の顔色に気付いて微笑む。  
酷く綺麗なそれは、嘲りであったとしても、綺麗だった。

悲しいような、なんと言って良いか分からない気持ちになって、  
そっと目を伏せる。

俺の仕草を見つめていたスイキが、けれど、と小さく呟いた。

「私は、その子供が生まれて良かったと思った」

言われて、一瞬、何もかもが止まる。

今、スイキは何と言ったのだろうか。

スイキはまだ続けている。

「私とその子供は出会えたのだから。だから、生まれてくれて良かったと。そう思った」

言われて、俺の口が知らずに動く。

「……母親を殺してるのに？」

そうだ。

その、『禁忌の子供』は、生まれてくる瞬間に母親を殺してるのに。

俺の言葉に、ああそれでもだ、とスイキは答える。

「母親が望まなければ、子供が生まれるものか。恐らくは何もかも承知で。……何も知らなくても、子供が生まれることを喜ばない母親なんて、そいないだろう？」

「……」

「それに、『禁忌』の子供は必ず母親を死なせてしまうのだという  
本で読んだのだという知識で、スイキは言った。

「だから、それはその子供の罪である筈がない」

「……じゃあ、誰が悪いんだよ」

そっと、俺は囁いた。

だって俺は憶えている。

この世界に生まれたその瞬間のことを。

今まで生きていた母親の胎内という世界を、この手で壊して生  
まれたその時のことを。

「殺してしまったのは、確かに小さな子供の手だったのに」

言いながら、ああけれど、と思い出す。

あの人も、確かそう言っていた。

『あの子、に、罪は、無い、の……』

女の人の声が、蘇る。

俺を殺そうとしていた父さんを、そう言って落ち着かせていた。

他にも何か言っていたけれど、俺の耳には届かなかった。

ただ、腹を真っ赤に濡らして青ざめた彼女を、見ていることしか  
出来なかった。

「罪人なんて何処にもいない。ただ愛し合う二人がいて、その間に  
子供が生まれた。その子供を責めてどうするんだ。望まれたから生  
まれてきたのに」

スイキは、あっさりとそう言う。  
繰り返し繰り返し、望まれた子供だったのだと言う。  
それは酷く優しく、とてつもなく残酷だと思った。  
それでも。

「……ありがと、スイキ」

それを嬉しいと思う俺の方が、残酷だ。  
俺の言葉にスイキは笑った。  
それは優しく、優しくて。  
やっぱり綺麗だ、と思った。

十  
十  
十

日が暮れだした頃。  
ヒョウガキ様を連れて帰ってきたセイクウ様は、チノというあの子とカエンは二人とも家に送ったと言った。  
それから、そろそろ君も帰るか、と俺を見て言う。  
だから俺は頷いて、スイキの横から立ち上がった。

「明日も来るか？」

「おう。大丈夫？」

「問題はない」

にんまり笑って答えると笑みを返されて、その綺麗さで幸せなつもりになりながら、じゃあね、と声を置いて歩き出す。

空気が動いたなと思ったら、セイクウ様が付いて来ていた。もう帰るのだろうか。

その腕の中では小さなフウキが眠っている。

俺達二人は、何か言葉を交わすでもなく廊下を歩き、そして二人揃って玄関から外へ出た。

外はもう薄暗くて、日は殆ど完全に落ちている。早く月が昇ればいいのにと空を見上げた時、後ろから声が掛かった。

「モクカくん、大丈夫かい？」

言われて振り向くと、セイクウ様は既に空中へ浮かび上がっていて、俺を見下ろしていた。

「何のことですか？」

俺はゆっくりと首を傾げた。

すると、セイクウ様は俺の頭上を通過し、俺の正面でゆったりと浮かびながら俺の顔を見つめてくる。空色の瞳が、薄暗い世界でもはつきりと見えた。

「無理でもしているのかい、モクカくん？ 目が疲れてるね」

俺は目を見開いた。

スイキもこの人も、どうしてそんな事が分かるんだ。

「……最近、怖い夢ばかり見るんで」

俺の答えに、セイクウ様が首を傾げる。今更隠す事でもないから、俺ははっきりと告げた。

「俺が、母さんを殺した時のことを思い出すんです」

花びらみたいに散った赤い水と、普通じゃないにおい。  
初めて見た外と、男の人の泣き叫ぶ声。

『純血種』である俺は、自分が生まれたその瞬間から自我を持つて、そしてその時からの全てを憶えている。  
父さんに首を絞められたことも、母さんがそれを止めたことも、今この瞬間のことも、ずっとずっと、憶えているのだ。

「それと……」

俺は、ゆっくりと自分の首に触れる。

「……父さんが……」

父さんは俺を殺す気だった。  
自分が愛した人を殺した化け物の首へ、あの人はその手を押し当てた。  
俺があの時死ななかったのは、それを止めた優しすぎる被害者がいたからだ。

だから、俺はこの世界に今も存在している。

誰も、俺がここにいることを望んでいないのに。  
暗い思考へ沈んだ俺の頭に、何かが触れた。

我知らず俯いていた俺の髪を、優しくそれは撫でる。  
セイクウ様の掌だった。

「そうか……君は、あの時のことを全て憶えてるんだったね」

そうだったねと思い出したように呟いて、セイクウ様は俺の頭をなで続けた。

「ねえ、モクカくん。あの日、ナノハは死んでしまった。けれど…：けれど、君は生きているだろう？」

セイクウ様は俺の母親をナノハと呼ぶ。その小さな声に、俺は俯いたまま頷いた。

分かってる。

俺は、あの日殺されるべきだったのに、殺すべき一番の復讐者が被害者に止められてしまったから、今も尚生きながらえている。本当なら、殺されているはずだったのに。

「君は生きている。それが、どういう意味なのかは分かる？」

セイクウ様は囁き、その手を止めた。

「それは、君が彼に必要とされたからだよ」

その言葉に、俺は弾かれたように顔を上げた。

薄暗いこの場所で、けれどセイクウ様の表情は伺える。

＞風王く様は笑んでいた。

そうして、あんまりにも酷くて残酷なことを言う。

「君は、彼に……シヨウに、必要とされているんだ。それを忘れちゃ駄目だよ」

セイクウ様が囁いたのは、俺の父親の名前。

何て酷いことを言う人なんだろう。俺は呆然と彼を見上げた。

俺が、必要とされている、だなんて。  
それも、あの人に。

俺の呆然とした視線の前で、愛しげに幼い息子を抱き上げたまま、  
セイクウ様は笑んでいる。

そしてふわりと俺の体を風へと乗せた。足の下から地面の感触が  
無くなる。

「暗くなるからね、送っていくよ」

セイクウ様の申し出を聞いても、頷くとか、礼を言うとかそれどころじゃない。

俺は、懸命に声を絞り出した。

「……んで……そんな、こと……!」

「だって、本当のことだろう?」

俺の眼の前でセイクウ様は微笑んだまま、ふわふわと風を操り、  
俺も伴って移動を始める。

「ナノハは死んでしまった。いつだって、幼くてか弱い君を殺せた  
のに、けれどシヨウはそうせず、君を育てた。……そうだろう?」

「そう、だけど……でも、でもあれは……!」

あの、優しい優しい女の人が、己が傷付きながらも懸命に父さん  
を止めてくれたからだ。

あの子は悪くないのよと、酷く優しくして残酷なことを言って、母  
さんは自分の夫をがんにがらめにした。

だから、父さんは俺を殺さなかったのだ。

「死者は決して蘇らない。死者は何も知ることが出来ず、何も感じない」

セイクウ様は、ぽつん、と呟く。

「ナノハが死んでしまった時点で、シヨウは君を殺せたんだ。そうしなくても、捨てていくことだって出来た。けれど、そうしなかった」

どうか、分かってあげて欲しいと、低く響く優しげな声が言う。

「シヨウには君が必要だったんだ。もちろん、今も」

その声は、風に紛れるようにして消えていくほどに穏やかで小さくて、けれど確実に俺を突き刺した。

ゆるゆると飛び上がっていた俺達の高度が下がり始め、足の下に短い草の感触が訪れる。

いつの間にか、俺は家の前まで送り届けられていた。

「さ、着いたよ？」

家を認識して尚立ち止まったままの俺へと、セイクウ様が囁く。それを聞いて、俺はセイクウ様を振り仰いだ。

「セイクウ様」

そっと、俺は、この世界で最も強い四人の内の一人に尋ねる。

「けど、俺は確かに母さんを殺した」



それは事実。俺はそうすることでしか生まれられない、化け物だ。

「どうすれば俺は、それを贖えるんですか」

必要とされていないことで、存在を否定されることで償えるならそれでも良かった。

けれどそれすら出来ないというのなら、俺はどうやって父さんへ詫びればいいのか。

「死者は決して蘇らない。だから、失った命を還すことは出来ない」

セイクウ様は、そう呟いて腕の中の息子を抱き直す。

セイクウ様に向かってすり寄ったその幼い子供は、未だ眠り続けている。

「それでも、相手に失わせた何かを贖いたいと言うのなら……まずは、自分を許してあげるといい」

セイクウ様の囁きは優しいまま、けれど俺の耳を突き刺し続ける。

「そうして、自分を許してから。自分が出来る事へと、手を伸ばせばいいんだよ」

「……でも、それじゃあ……」

「自分が出来ない事へ手を出したって、仕方がないだろう？ 君に、ナノハの代わりは出来ない。シヨウに、ナノハの代わりが出来ないように」

なんと言えいいのか、分からない。

俺は、多分阿呆面を晒してセイクウ様を見上げていた。

その顔は、きつと、泣いているような安心していているような悔しがつているような、そんな訳の分からない顔だったのだろう。

セイクウ様は微笑んだまま、かんしゃくを起こしそうな子供を慰めるように俺の頭を撫でた。

「そんなに一生懸命考えなくたって、すぐ分かるよ。とっても簡単な話さ。とりあえず……今日はこのまま家へ入ればいい。ただいま、とても言いながらね」

そう告げて、>風王<様の手が俺を前へと押す。

たたらを踏む形で、俺は前へと進まされた。反射的に、手がドアノブを捕まえる。

肩越しに振り返ると、セイクウ様はそこに漂いながら俺を見ていた。中に入るまでそうしているつもりなんだろう。

俺は、扉へと向き直った。

もう、日は完全に落ちていている。父さんは帰って来ているだろう。少しだけ深呼吸をして、それから勢いよく扉を開く。

「ただいま！」

半ばやけくそ混じりで声を上げて扉を閉めた俺は、目の前にいた人を視界に収めて硬直した。

それは、夢の中で幾度も俺への殺意を叫んでいる、たった一人だ。父さんが、目を丸くして立っていた。

多分、リビングへ移動する途中だったんだろう。

セイクウ様はここまで計算ずくで中へ入れと言ったんだろうか。まさか。

どうしよう、どうしたらいいのだろう。俺は立ちつくしながら、

負け犬のように父さんから顔を逸らす。

だって、父さんが俺の顔を見たいとは思えない。

俺の記憶の中のこの人は、いつだって俺を殺すと泣き叫んでいる。大切なものを奪われた悲しみの中で慟哭している。

そんな人が、俺を見て楽しいとは思えない。

早く立ち去ってくればいい、と思ったけれど、何故か父さんが動く気配は無かった。

俺の部屋への階段は父さんの背後だ。部屋へ逃げ込むには父さんの横を通り抜ける必要がある。俺には無理だ。

いつそもう一度外出しようか。けど、もしかしたらセイクウ様が外で見張っていないとも限らない。

ああもうそれでも良いから一度外へ出ようか、と沈黙に耐えられず選択しようとした時、俺へ向かって声が降った。

「……おかえり」

驚いて、顔を上げる。

目の前で、父さんが微笑んでいた。眉を少し下げて、困ったように笑っていた。もしかしたら、俺から話し掛けた所為かも知れない。でも。

その顔に、憎しみなんて見つけれない。

困惑する俺へと、改めたように父さんは言う。

「おかえり、モクカ」

優しい声で。

なんだか、それだけで、泣いてしまいそうで。

「……………ただいま」

俺は、無理矢理、笑った。

十  
十  
十

奪った物は戻らない

俺は化け物で 償う術すら知らぬ愚かな獣で  
なのに

勘違いして 手を伸ばして 求めて  
それでも良いなんて

あたたかなひだまりに 涙が出た

E  
N  
D

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9960q/>

---

精霊の子供の話(モクカ)

2011年2月28日09時55分発行